

京都・清水寺



二年坂にて(撮影:2025年11月11日、渡辺和之)

阪南大学国際学部国際観光学科

渡辺ゼミ

はじめに

国際観光学科教員 渡辺和之

国際観光学科では、一年生の後期には、日帰りでゆける範囲で関西の観光地をゼミで訪れ、レポートを書くことになっています。今年のゼミでは清水寺にゆくことになりました。ただでさえコロナ禍が終わって外国人観光客も戻って来た京都です。その京都のなかでもいつ訪れても人が絶えることのない人気の観光スポットの清水寺です。しかも紅葉シーズンまっただ中の週末にゆくというのです。おそらく通勤通学電車並みの混雑が予想できるでしょう。そんな所へそんな時期になぜまた行くのでしょうか？

聞くと、「去年、家族で行ってライトアップが綺麗だったから」と女子学生は答えました。「みんなでまた行きたい」のだそうです。「ものすごい人でなかったのか」と聞くと、「人は大勢いたけど、そこまでひどくはなかった」といいます。そうでした。若者は、人混みそのものは嫌いではないのです。花火もお祭りも初詣も若者は人混みをかき分けて見物にゆくのを厭いません。むしろ人がたくさん行く所は、「いいね」がたくさんついている所と一緒に、確実に楽しめるとさえ思っている節があります。「辞めよう。京都に行くのは止めないけど、この季節の清水寺だけは辞めよう。清水寺の他にも京都に良い所はたくさんあるし、ライトアップしている所もあるので、みんなで探して行こう」。私は必死で彼らを説得したのですが、どうしても「清水寺に行きたい」というのです。あまりにも私がかたくなに反対するので、学生は神戸に行く代案を考え出しました。「いや京都が駄目だというのはなく、清水寺は勘弁して」というのが学生たちにはなかなか通じません。

さて、どうしたものだろうかと、他の男子学生にも話を聞いて見ました。すると、「京都には行ったことがない」という学生が少なからずいるのです。たしかに南大阪から京都までは片道2時間かかります。学生のなかには和歌山や奈良から通う人もいます。京都は彼らにとって近場ではないのです。清水寺といわれてもよくわからない人たちに、清水寺をすっ飛ばして、それ以外の場所を探してみようというのは酷なことなのかもしれません。それは大阪が初めての人に大阪城をすっ飛ばしていきなり岸和田城に連れて行くようなものなのかもしれません。やはり物事には順番というものがあり、初心者はより知名度のある場所から行くのが王道なのでしょう。

わかった。清水寺を見ずして京都を語るなかれ。それは誰しもの通る道なのです。だったら行こう。多少の混雑はやむを得ません。ライトアップもみんなで見よう。これでみな歴史や文化に関心をもってくれるというのであれば安いものです。

かくして、2025年11月11日（土）、われわれは清水寺へ行きました。清水寺に行く途中、六波羅蜜寺、二年坂、三年坂にも立ち寄りしました。また、京都の和菓子を調べる人も出てきました。

以下、学生の手記をお読みいただければと思います。

清水寺の本堂について

国際観光学科 1 年 川崎詩帆

1. 本堂の概要

このレポートでは清水寺の歴史や建築技術について事前学習し、実際に見てきたことを書いていきたいとおもいます。

森清範・田辺聖子（著）『清水寺』によると、清水寺の本堂は江戸時代の寛永 6 年（1629）の火災によって焼失し、その後、寛永 10 年に再建された建造物であると述べられています。本堂は正面約 36 メートル、側面約 30 メートルという大規模な建築で、清水寺を象徴する「清水の舞台」を有する中心的な伽藍です（写真 1）。本堂は多数の柱が林立し、その上に舞台が支えられるという大規模な構造が特徴となっています⁽¹⁾。

2. 舞台の建築技法

また、『清水寺』によると、清水の舞台は錦雲溪に向かって最大 12 メートル張り出しており、ケヤキ材の柱を縦横に組み合わせ、貫（ぬき）によって固定する「懸造（かけづくり）」と呼ばれる技法で建てられているとされています。釘を使わずに巨大な建築を成立させる伝統技術は、日本建築の高度さを示しています。さらに舞台は能や歌舞伎の奉納にも用いられ、本堂と一体となって信仰と文化の場として機能してきました⁽²⁾。

3. 本堂内部の構造と信仰

『清水寺』によると、本堂の内陣には本尊である十一面千手観音が安置され、外陣（げじん）は一般参拝者が礼拝を行う空間として広く設けられていると述べられています⁽³⁾。柱が林立する内部空間は荘厳さを感じさせ、古くから多くの参拝者に祈りの場を提供してきました（写真 2）。本堂は建築美だけでなく、信仰の中心としても重要な役割を果たしています。

4. 清水寺の本堂を見てみた感想

実際に清水寺の本堂を見学してみて、まずその巨大さと迫りに圧倒されました。写真で見るとはるかにスケールが大きく、特に舞台を支える無数の柱が整然と並ぶ姿は力強さと美しさを同時に感じました（写真 3）。釘を使わずに組み上げられたと知ると、その技術の高さに驚かされ、日本の伝統建築のすごさを改めて実感しました。また、舞台から見下ろす景色はとても開放的で、昔の人々が自然への畏敬の気持ちを持ちながら建物をつくったことが伝わってくるように感じました。本堂の内部に入ると外とは雰囲気が変わり、静かで厳かな空気に包まれました。内陣の観音像に向き合うと自然と背筋が伸び、参拝する人々の真剣な姿から、信仰の場として長く大切にされてきたことがよく分かりまし

た。清水寺の本堂は、歴史的価値、建築技術、信仰の重なりによって成り立つ特別な場所であり、日本文化の豊かさを実感できる貴重な体験となりました。

【注】

(1) 森清範・田辺聖子 2008 『清水寺』 淡交社、p.16。

(2) 同書、p.13-16。

(3) 同書、p.16。

【参考文献】

森清範・田辺聖子 2008 『清水寺』 淡交社。



写真1 清水寺の本堂の入口
撮影：川崎詩帆



写真2 清水寺の本堂の中でお祈りする人たち
撮影：川崎詩帆

写真3 下から見た清水寺の舞台、
撮影：川崎詩帆



歴史が深い清水寺の本堂について

国際観光学部 1年 奥村心海

1.はじめに

清水寺の本堂は、京都を象徴する歴史的建造物として古くから広く知られています。その建築様式や文化的背景は、日本の宗教文化や伝統的な木造建築を理解する上で非常に重要な役割を果たしています。本レポートでは、本堂の歴史、建築的特徴、そして文化的意義の三点から、その魅力を考察します。

2.本堂の歴史

TAC 出版編集部『おとな旅プレミアム京都 第4版』（2024）によると、清水寺は778年に開山されたと伝えられており、本堂は長い歴史の中で幾度も焼失と再建を経験してきました。現在の本堂は1633年、徳川家光の寄進によって再建されたもので、江戸時代の建築技術が色濃く残っています。本堂は長い年月を通じて信仰の中心として機能し、多くの人々の祈りが込められた場所となっています¹⁾。

3.建造的特徴

同書によると、錦雲溪の崖の上にある国宝の本堂は、168本の木柱が建物を支えています。崖の上にせり出すように建つ「懸造り」という建築様式で、釘を使わず、縦横にケヤキの柱と貫を組み上げて建てられています。舞台の高さは約13mもあり、平安時代から江戸時代には、観音様に願をかけ命がけで飛び降りた人が何人もいました。そこから、重大な決心を意味することを表す「清水の舞台から飛び降りる」の語源になりました²⁾。また、本堂奥の子内に秘仏の十一面千手漢音を祀る。本堂から張り出した舞台は、漢音様に芸能を奉納する場所です。多くの木組で支える懸造りが特徴です³⁾。

4.文化的意義

清水寺の本堂は、ただの観光名所ではなく、昔から人々の信仰を支えてきた大切な場所です。観音信仰の中心として多くの人々が祈りを捧げてきた歴史があり、その存在が日本の宗教文化にも大きく関わっています。また、「清水の舞台から飛び降りる」ということわざにあるように、本堂は覚悟や決断の象徴としても知られ、昔の人々の価値観に影響を与えてきました⁴⁾。さらに、本堂から見える京都の景色は、季節ごとの美しさがあり、古くから絵画や文学の題材になってきました⁵⁾。桜や紅葉の時期には特に多くの人々が訪れ、現在では国内外の旅行者が集まる京都を代表するスポットとなっています。そのため、本堂は文化財としてだけでなく、京都の観光を支える役割も大きく担っています。

5.まとめ

清水寺の本堂は、長い歴史の中で受け継がれてきた信仰や建築技術が詰まった、とても価値のある建物です。「清水寺の舞台」に代表される独特の建築は、日本らしい美しさを感じるだけでなく、多くの人の心に残る景観を作り出しています。

【注】

- 1) TAC 出版編集部『おとな旅プレミアム京都 第4版』TAC 出版、2024年、22ページ。
- 2)同上、43ページ。
- 3)同上
- 4)同上
- 5)同上

【参考文献】

TAC 出版編集部 2024『おとな旅プレミアム京都第4版』TAC 出版



写真1 清水寺のライトアップ

撮影：奥村心海

清水寺の仏像について

国際観光学科 1年 森田凌雅

このテーマにした理由は、仏像について知りたいと思ったからです。このレポートでは清水寺の仏像について書いていきます。今回参考にした森清範（監修）・田辺聖子（著）『清水寺』（淡交社）では、清水寺の歴史的背景や信仰の特徴が分かりやすく解説されており、寺の成立から現在に至るまでの理解を深めることができました。

同書によると、清水寺は京都を代表する寺院として広く知られており、古くから多くの参拝者に親しまれてきました。その創建は奈良時代末期の778年と伝えられており、開創者とされる延鎮（えんちん）が音羽の滝に導かれて草庵を結んだことが始まりだとされています。後には坂上田村麻呂（さかのうえのたむらまろ）が伽藍（がらん、寺院の建物のこと）の整備を進め、寺院としての規模と影響力が拡大していきました⁽¹⁾。

清水寺の象徴的存在である「清水の舞台」は、断崖に張り出すように建てられた本堂の懸造（かけづくり）構造によって支えられています。この舞台は釘を使わずに木材を組み上げる日本古来の技術の結晶であり、当時の高度な建築知識を示すものです。同書では、多くの柱がどのように組まれているのか、その配置がどのような意味を持つのか丁寧に紹介されており、建築史の観点から清水寺の価値を理解する助けとなりました。また、舞台から眺める京都市街の風景は古くから多くの人に絶景として愛され、絵画や文学作品にも数多く描写されてきました⁽²⁾。

さらに清水寺は、観音信仰の中心として長い歴史を築いてきました。ご本尊である十一面千手観音は人々を救う存在として広く敬われ、特に平安時代には宮廷文化とも深く結びついて参詣者が増加したとされています。田辺聖子氏によると、清水寺が観光地としてだけでなく、時代を超えて多くの人々の「祈りの場」として受け継がれてきました⁽³⁾。

もう一冊の『御朱印でめぐる京都のお寺』（ダイヤモンド社）は、現代の参拝文化を理解する上で参考になりました。同書では御朱印の意味や寺社巡りの魅力が紹介されており、清水寺が現代でも多くの参拝者を惹きつける理由を知ることができます。清水寺の御朱印には「大悲殿（だいひでん）」と墨で書かれています⁽⁴⁾。「大悲」とは人々の苦しみを救済する慈悲（じひ）の心であり、観音様の別称なのだそうです。つまり、「大悲殿」は観音様のおられるお堂をさすわけです⁽⁵⁾。

また、境内に湧き出る「音羽（おとわ）の滝」は清水寺創建の由来そのものであり、現在でも参拝者が絶えない場所です。三つに流れる水は学業成就・恋愛成就・延命長寿などの御利益があるとされ、日本独自の信仰文化が表れています⁽⁶⁾。

これらの文献を通して、清水寺は歴史的・宗教的・文化的価値を兼ね備えた寺院であることが理解できました。単なる観光地ではなく、「千年以上にわたって多くの人々の祈りを受け止めてきた重要な場所」であることを再認識しました⁽⁷⁾。

実際に清水寺を訪れて人の多さに度肝を抜かれました。どこ見ても人間ばかりで、めち

やめちゃ人がばんばんでした。日本人よりも外国人の方が多く、異国のようでした。

ちなみにご本尊の十一面千手観音は秘仏（ひぶつ）であるため、お顔を拝むことはできませんでした。事前学習でいろんな仏像の本を探してみましたが、清水寺のご本尊のことは載っていませんでした。おそらく秘仏であるからなのでしょう。清水寺のホームページによると、一般公開するのは33年に1回で、次回は2033年なのだそうです⁽⁸⁾。

まとめ

人生で初めて清水寺を訪れました。実物で見の方が迫力あり、人の量もとても多く、流石の世界遺産に登録されている伝統な建物なのだと感じました。今回の学習を通じて、清水寺には奈良時代からの古い歴史があることを学びました。また、清水寺の観音様が秘仏ということも学びました。このフィールドワークで仏像にも少し興味が沸き、他の寺院の仏像についても学んでみたいと思うようになりました。

【注】

(1)森清範（監修）・田辺聖子（著）2010『清水寺』淡交社, pp.37-39.

(2)同書, pp.37-39.

(3)同書, pp.37-39.

(4)『地球の歩き方』編集室 2019『御朱印でめぐる 京都のお寺（第3版）』ダイヤモンド社, pp.56-57.

(5)鹿鳴文庫「巡礼資料集：大悲殿の意味」

<http://rokumeibunko.com/chizu/note/gosyuinyogo/yogo005.html>（閲覧日：2025年12月3日）

(6)森清範（監修）・田辺聖子（著）2010『清水寺』淡交社, pp.56-57.

(7) 同書, pp.56-57.

(8)清水寺ホームページ（閲覧日：2025年12月3日）

【参考文献】

森清範（監修）・田辺聖子（著）2010『清水寺』淡交社

『地球の歩き方』編集室 2019『御朱印でめぐる 京都のお寺（第3版）』ダイヤモンド社



写真1 清水寺の本堂を眺める人々、撮影：森田凌雅

清水寺の紅葉のライトアップ

国際観光学科1年 石川 駿介

京都を代表する寺院の一つである清水寺は、四季を通して多くの人を訪れる人気の場所です。その中でも、秋の夜に行われるライトアップは特に人気が高く、昼とは全く違う景色が楽しめます。昼間は参道も舞台も人が多くにぎやかですが、夜になると照明がつき、静かな雰囲気の中で紅葉や建物が幻想的に浮かび上がります。

ライトアップされた境内に入ると、光によって紅葉の色がよりはっきり見えることに気づきます。赤や橙の葉が照明によって鮮やかになり、葉の一枚一枚まで細かく見えるほど輝いて見えます。京都市観光協会が「夜間照明によって紅葉の立体感が強調される」と話しているように⁽¹⁾、夜の紅葉は昼とは違った迫力があります。風で葉が揺れると色が少し変わって見え、その瞬間ごとに景色が移り変わるのがとても印象的でした。

特に心に残ったのは、清水の舞台から見下ろす錦雲溪の紅葉です。谷全体がライトに照らされ、暗い部分との対比で色がいつそう際立って見えます。清水寺公式サイトでも「紅葉と舞台の調和が人気」と紹介されており⁽²⁾、そのとおり舞台からの景色は一枚の絵のように感じられました。

また、奥の院から見るライトアップもとても印象的でした。夜空に向かって伸びる青白い光芒は清水寺の象徴で、「観音さまの慈悲を表す光」と説明されているそうです⁽³⁾。

この光の下で照らされる舞台や紅葉は、自然と建物、そして光が一つになって、より神秘的な雰囲気をつくり出していました。

清水寺のライトアップが人気なのは、紅葉がきれいなだけではありません。建物の形や構造が夜の照明によって強調され、紅葉と一緒に見ることでさらに魅力が増しています。京都市文化財保護課の資料にも「懸造りの迫力が夜間に増す」と書かれていて⁽⁴⁾、確かに夜の本堂は昼よりも立体感が強く感じられました。

さらに、夜の静けさも大きな特徴の一つです。昼間のようなにぎやかさがなく、落ち着いた雰囲気の中でゆっくりと紅葉を見ることができます。足音や風の音、鐘の音が響く境内はとても心が落ち着く空間で、歴史ある寺院ならではの重みも感じられました。

全体を通して、清水寺のライトアップは秋の京都を代表する景色だと感じました。紅葉の美しさだけでなく、建物の迫力や静かな雰囲気が合わさり、特別な体験ができる場所です。一度訪れると物凄い魅力があり、多くの人々が毎年楽しみにしている理由がよく分かりました。

【注】

(1)–(4)成美堂出版 2023『歩く地図秋の京都散歩, 2023』成美堂出版

【参考文献】

成美堂出版 2023『歩く地図秋の京都散歩, 2023』成美堂出版

清水寺の紅葉について

国際観光学科 1年 松本璃久

清水寺の紅葉は、日本の秋を代表する風景として多くの人に親しまれています。色づいたモミジと歴史ある建物が重なり合う景色はとても印象的で、日本人が昔から自然とどのように関わってきたのかを感じさせます。清水寺の紅葉を通して考えると、日本人は季節の移り変わりを大切にし、自然と共に生きようとしてきたことが分かります。

まず、清水寺の紅葉の魅力は、自然と建物がうまく調和している点です。清水の舞台や三重塔のまわりには多くのカエデが植えられており、秋になると寺全体が赤や黄色に染まります。この景色は偶然ではなく、長い年月の中で季節ごとに美しく見えるように植栽が工夫されてきた結果です。「日本庭園や寺院では、カエデが季節の変化を象徴する植物として大切に植えられてきた」という本の説明とも重なっており⁽¹⁾、建物の色や形と紅葉の色が合わさることで、より深い美しさが生まれています。

また、日本人が紅葉に特別な思いを持っているのは、「移ろい」を大切にする文化があるからだと思います。「日本人は季節の変化を楽しみ、自然の移り変わりの中に美を見いだしてきた」という本の指摘のように⁽²⁾、紅葉は一年のうちほんの短い時期しか楽しめません。そのため、色づき始めから散りゆくまでの変化に、はかなさや美しさを感じる人が多いです。清水寺の舞台から紅葉を眺めると、鮮やかな色の美しさだけでなく、季節が変わっていく静かな時間を味わうことができます。この感覚は、昔から日本人が大切にしてきた「侘（わ）び・寂（さ）び」にも通じています。

さらに、清水寺の紅葉は観光だけでなく、信仰や生活文化とも関わっています。清水寺は山の中にあり、昔から自然と神仏が近い場所として人々の信仰を集めてきました。「日本の寺院は自然に包まれた場所に建てられ、自然と宗教が結びついてきた」という本の内容と同じように⁽³⁾、参道を歩きながら紅葉を見ることは、単に景色を楽しむだけでなく、自然と向き合う時間にもなります。多くの人が秋になったら清水寺を訪れるのは、季節を感じる事が生活の一部になっているからだといえます。

また、清水寺に植えられているモミジには、日本の気候に合った種類が多くあります。「日本にはカエデ科の植物が多く、特にイロハモミジは紅葉の代表である」という本の説明のように⁽⁴⁾、イロハモミジやオオモミジなどは葉の形が美しく、深い赤色に染まるのが特徴です。これらの木は昔から寺院や庭園で大切にされてきた種類で、紅葉の景色をつくる重要な存在です。

このように、清水寺の紅葉には、日本人の自然に対する考え方がよく表れています。自然と建物を合わせて楽しむこと、移ろう季節を大切にする事、生活や信仰と自然が結びついていることなど、さまざまな要素が重なって清水寺の紅葉の魅力をつくっています。紅葉を通して、日本人が自然と共に生きてきた姿勢を感じることができるといえます。

【注】

(1) 朝日新聞出版（編）2022『楓と紅葉』朝日新聞出版, 42 ページ.

(2) 同上

(3) 同上

(4) 同上

【参考文献】

朝日新聞出版（編）2022『楓と紅葉』朝日新聞出版



写真1 清水寺の紅葉のライトアップ、撮影：松本璃久

清水寺の阿弥陀堂

国際観光学部 SA 3年 辻脇充樹

後期の大学入門ゼミでは、フィールドワークで京都の清水寺に行きました。清水寺の近くに行ったことはあったのですが、中に入ったことはありませんでした。清水寺には仁王門や本堂のような建築物がいろいろあります。その中で、私は、阿弥陀堂がどうゆう場所なのか気になったので調べることにしました。

清水寺のホームページによると、現代の阿弥陀堂江戸時代初期の1631年に再建されました。浄土宗の開祖・法然上人が唱導した常行念仏（じょうぎょうねんぶつ）が日本で最初に行われた場所であることから、法然上人二十五霊場の第十三番札所として多くの参拝者が訪れます。本尊は阿弥陀如来です。阿弥陀堂は、入母屋造り（いりもやづくり）、檜皮葺（ひわだぶき）の建築様式です。重要文化財に指定されています¹⁾。

実際に行ったときは、17時を過ぎて暗くなっていました。しかも、紅葉のライトアップの期間であり、阿弥陀堂のところも人が多く集まっておりました。お堂の中が少しだけ見れるようになっており、なかに阿弥陀如来像が見えました。阿弥陀堂は自分が想像していたよりも小さかったです、本尊の阿弥陀如来像は金色に光っており目に入りやすくなっていました。

中井真孝の『絵伝に見る法然上人の生涯』によると、「法然上人は、大原の勝林院（しょうりんいん）で諸宗の碩学（せきがく）を前に、末世に生きる罪深い凡夫（ぼんぶ）が迷いの世界を離れることができる教えは浄土門（じょうどもん）しかないこと、阿弥陀仏の名号をとさえれば極楽浄土に往生できることを説き明かしました。また、仏教のなかで浄土と念仏が当時の人びとに最もふさわしい教えであると宣言されたひとである」そうです²⁾。

また、『絵伝に見る法然上人』の生涯によると、あるとき上人は清水寺で説戒（せっかい）を行われたそうです。そのとき罪人の凡夫（ぼんぶ）であっても、阿弥陀仏の本願をたのみ念仏すれば、往生は疑いない趣旨を懇切に説かれたのです。それを聞いた大勧進（だいかんじん）の印蔵（いんぞう）は、ひとえに念仏に帰依（きえ）しました。そこで印蔵は、文治四年（1188）5月、瀧山寺（清水山内にあったお堂）において「不断常行念仏三昧（ふだんじょうぎょうねんぶつざんまい）」を始めたのです。多くの僧俗が結縁（けちえん）したといいますが、阿弥陀堂の常行念仏と呼び、今につづいております。また、現在では奥の院の北に阿弥陀堂が建っており、法然上人像も祀られているそうです³⁾。法然上人も浄土宗も有名ですが、その法然上人が清水寺の中の阿弥陀堂で説戒をしたことを初めて知り、その建物を見るだけで特別感を感じることができました。阿弥陀堂は、本堂の奥にあるため、ライトアップ期間だとたどり着くまで人込みの中を行かなければなりません。阿弥陀堂の周囲は人が多く、堂内にある法然上人像はみれませんでした。

阿弥陀堂を調べてみて、はじめて知ることが多くありました。重要文化財になっている

ことや法然上人が訪れていたことなども知りませんでした。そもそも清水寺に阿弥陀堂があることもよくわかっていませんでした。事前学習をしていたので、阿弥陀堂の魅力を感じることができました。清水寺に行くときは法然上人のことを知ってから阿弥陀堂に行くことをおすすめします。

【注】

(1)清水寺「巡る/音羽山清水寺」<https://www.kiyomizudera.or.jp/map.php>（採録日：2025年11月19日）

(2)中井真孝 2011『絵伝に見る法然上人の生涯』法蔵館、p.92

(3)同書 p.93-97

【参考文献】

中井真孝 2011「絵伝に見る法然上人の生涯」、法蔵館

清水寺「巡る/音羽山清水寺」<https://www.kiyomizudera.or.jp/map.php>（採録日：2025年11月19日）

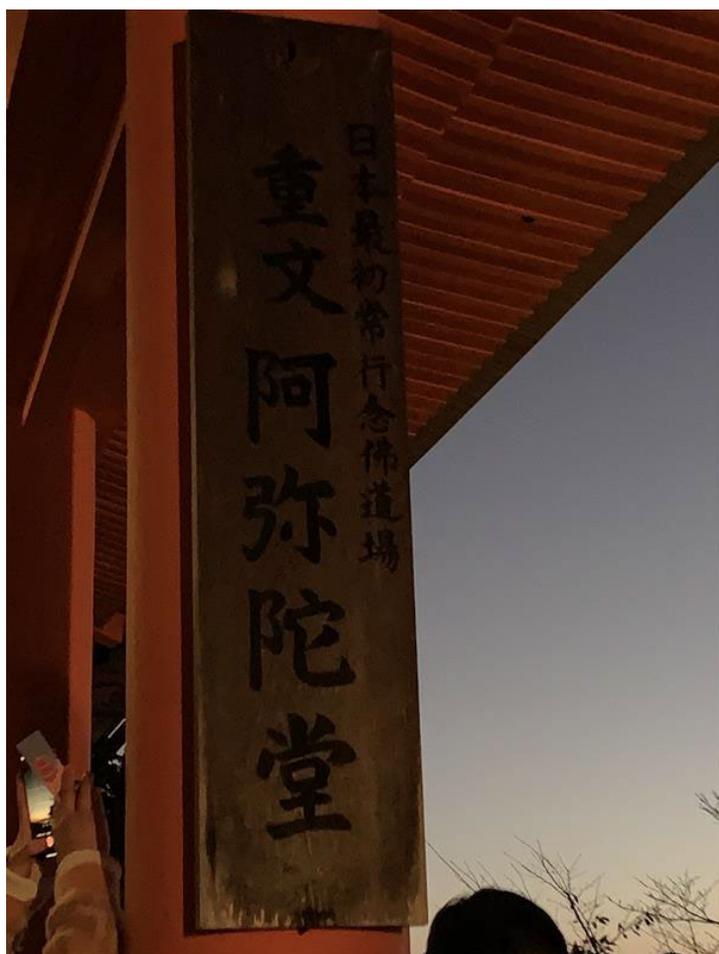


写真1 清水寺の阿弥陀堂、撮影：辻脇充樹

音羽の瀧

国際観光学科1年 森高栄太

音羽の瀧とは

音羽の瀧は、都・東山にある清水寺の境内の奥に位置する名水スポットです。寺名「清水寺」の由来ともなった重要な場所です。瀧は音羽山から湧き出る清水が流れ落ちるもので、古くから信仰の対象として親しまれてきました。『聖地と日本人』によると、古代から清らかな水が湧き続けており、「霊水（れいすい）」として信仰されてきました。この瀧の水は「延命水（えんめいすい）」「清めの水」として扱われ、身を清め、心を整える力があるとされてきました。参拝者は瀧の水を飲んで願いごとをしたり、手や口をすすいで心身を浄化します。清水寺を開いた延鎮上人（えんちんしょうにん）が音羽の瀧を見つけ、その霊験（れいげん）に感じて寺を建てたと言われています。つまり 清水寺の始まりそのものが、音羽の瀧からスタートしているのです¹⁾。

瀧の特徴

音羽の瀧は三本の筧（かけひ）から水が流れ落ちており、それぞれにご利益があるとされています。『聖地と日本人』によると、この三筋の水は「昔からさまざまな願いと結びついてきた」とあり、一般に次のように理解されています。1. 学業成就、2. 恋愛成就（良縁）、3. 延命・健康に御利益があるそうです²⁾。

現地の雰囲気は、多くの観光客で賑わっていました。周囲が人で混み合っている中、水の音はきこえて、心を落ち着かせてくれる場所でした。

観光化とのかかわり

『聖地と日本人』によると、近代以降、多くの観光客が訪れるようになると、瀧の使い方や参拝の仕方も変化しました。その一方で、観光客向けの解説が増え、「三本の瀧＝三つの願い」というイメージが強く広まりました。本来はもっと宗教的で深い意味がありましたが、観光化によってわかりやすい『願掛けスポット』として扱われるようになったそうです³⁾。

まとめ

音羽の瀧は、清水寺が生まれるきっかけとなった「霊水の湧く聖地」でした。古くから心身を清め、願いをかける場所として信仰されてきました。近代の観光化で「三つの願いの瀧」として有名ですが、本来はもっと宗教的・精神的な意味が深い場所でした。

音羽の瀧を前にすると、気持ちがすっきりする感じがしました。長い時間、変わらずここで水が流れてきていたと思うと、すごいなと感じました。三本に分かれた水を見ていると、どれにしようか迷った。それも一つの楽しみ方なのかなと感じました。音羽の瀧は、

願い事をするためだけでなく、少し立ち止まって心を整えることができる、やさしい場所だと思いました。観光で清水寺を訪れた際は、音羽の瀧にも寄ってみるのはどうですか。滝の音を聞いて気持ちをリフレッシュし、願い事をして運気を上げてみるのはいかがでしょうか。

【注】

- 1) 小松和彦 2021 『聖地と日本人』 角川書店, 36 ページ.
- 2) 同書, 37 ページ.
- 3) 同書, 37 ページ.

【参考文献】

小松和彦 2021 『聖地と日本人』 角川書店



写真1 音羽の瀧、撮影：渡辺和之

清水寺の歴史と信仰

国際観光学科 3年 SA 米田圭吾

はじめに

今回、清水寺を訪れるにあたり、清水寺の歴史を調べました。清水寺がいつどのような経緯で建ったのか、どんな信仰に支えられてきたのかを述べてゆきたいと思います。

1. 清水寺、賢心と田村麻呂の縁

作家の高野澄によると、清水寺は東山三十六峰のひとつ、清水山（音羽山）の西の中腹に建てられています。清水寺から流れる音羽の滝の水は、古くから、聖なる水と讃えられていました。東山連峰の麓は聖と俗との境界と考えられ、聖なる世界から流れ出て俗の世界を潤すのが音羽の滝だと畏敬されていました。滝の水に打たれて身を清め、口に含んで神秘の感に浸ることがおこなわれていたようです。身は俗の世界にありながら聖なる世界につながるができる、それが音羽の滝の恵みだと信じられていたのだそうです¹⁾。

音羽の瀧は清水寺の創建伝説と関わっております。ある日、南大和の子島寺の賢心（延鎮）が夢で「南に去って北へゆけ」とお告げを受けました。賢心は夢にしたがって北へゆき、淀川に一筋の金色の水が流れているのを発見しました。金色の流れの源を発見しようとして、なおもすすむと、平安京の清水山、音羽の滝が金色の流れの源だとわかりました。滝の上流の庵に1人の老人が住んでいました。この老人は行叡（ぎょうえい）と名付けられました。「われは東国へ修行にゆく。おまえはこの清水山の立木で千手観音像を刻んで安置し、われの戻るのをまで」と賢心に命じました。賢心は千手観音を作りましたが、行叡は戻ってきません。実は行叡は観音の化身だったのです²⁾。

清水寺の建立は坂上田村麻呂（さかのうえたむらまろ）です。坂上田村麻呂は桓武天皇から蝦夷（えみし）征伐を命じられ、征夷大將軍となりました。坂上田村麻呂は妊娠中の妻に鹿肉を食べさせるために清水山に入りました。そこで賢心と知り合います。坂上田村麻呂が賢心の話に妻にすると、「鹿を殺した殺生の罪を免れるために、わたしたちの家を解体し、賢心さまの観音像を安置する堂をたてましょう」と妻は言ったそうです。こうして、坂上田村麻呂が桓武天皇に許しを得て開いたのが清水寺だったそうです³⁾。

2. いま求められる観音信仰

清水寺の森清範貫主によると、清水寺は千二百年余の歴史を持ちます。この長い歴史を通じての基調として清水寺を支えてくれたのは、人々の観音様への信仰なのだそうです。平成二十年は「源氏物語千年紀」といわれ、「源氏物語」の筆が起こされて千年といわれています。同時に奇しくも、観音様への信仰を掲げる西国三十三観音霊場の、札所めぐりを再興してくださいました花山法皇様の千年大遠忌の年でもあります。この二つは、清水寺にとっても大きな意味を持っています。それは紫式部をはじめ、平安女流文人たちが、

いかに清水寺への信仰を大事にしていたかを、再確認させてくれ、清水観音が身分の上下貴賤を問わず、広く信仰されていたことを教えてくれるきっかけになってくれますし、花山法皇千年忌を期して三十三札所がこぞって行うご本尊のご開帳は、三十三所巡りの千年の歴史の中で初めてです。そして、現代に生きる観音信仰を証明するものだからです⁴⁾。

ちなみに森貫主は毎年12月に今年の漢字を一字で書くことで知られる方です。森貫主は、今こそ利他というお釈迦様の教えが大事なのだと言います。お釈迦様は、人間が自己中心的であることを喝破（かっぱ）されました。人間は自分のためになることしかしません。でも自分が大事なものは他人も同じです。だから自分を愛する者は他人も同じことを思っていると知らなければならない。これこそが「同悲」であり、「利他」なのだそうです⁵⁾。

3. 観音様の慈悲

作家の高野澄は、舞台をうめつくす多数の参拝者をみていて、奇妙な感覚におそわれたそうです。参拝のみなさんは観音さまにお尻をむけ、京の街並みに見とれていいいます。これは観音さまに失礼じゃないのか、祈りは届かないのではないかと。清水寺への参拝、それはなによりも本堂本尊の千手観音菩薩像の前にぬかずいて祈り、願うことほかならない。そういうことを知らぬはずなのに、この人たちは観音にお尻を向けている。これではまずいのではないかと言うのです⁶⁾。

しかし、その後、高野澄は奇妙な感覚を何度か体験したあと、これではこれでいいのだと納得したそうです。観音が一切衆生を招きよせ、たからかによびかける場、それが清水寺の本堂の舞台なのではないか。苦しいことはないか、辛いことはないか。苦しいこと、辛いことがあれば、あなたがどこに居ようとも、わが名をよび、わが名を唱えなさい。われはどこに居ても、あなたがたの苦悩を救うのであろう。眼下の京の街並みにみとれ、嬉々として戯れる衆生の背中に観音菩薩がよびかける観音と衆生の縁がむすばれる、その場が舞台なのではなかろうかというのです⁷⁾。

まとめ

清水寺の歴史を知ることによって、清水寺には過去から観音様に対する信仰があったことを深く知ることができました。観音様は信仰心のない観光客に対しても、おおらかに応えてくれる慈悲深い存在であることがわかりました。レポートを通じ、清水寺の奥深さに触れることができました。

【注】

1)森清範・田辺聖子 2008『清水寺』淡交社, p.89. 2)同書, p.90. 3)同書, p.90. 4)同書, p.78. 5)同書, p.84. 6)同書, p.88. 7)同書, p.88.

【参考文献】

森清範・田辺聖子 2008『清水寺』淡交社

清水寺の西門について

国際観光学科1年 中嶋伸輝

本レポートでは、京都の西門周辺を実際に訪れました。景観や人の流れ、周辺環境を観察することで、その空間が持つ特徴や役割について考察しました。

仁王門と西門は、寺院や神社などの構造において異なる役割と意味を持つ門です。まず仁王門は、多くの場合その寺院の正面入り口に位置する最も重要な門であり、左右に安置された阿形・吽形の二体の仁王像によって特徴です。子の仁王像は外から侵入する邪悪なものを追い払う守護神として役割を持ちます。仁王門は参拝者が境内へ入る際の精神的な区切りを示しています⁽¹⁾。

仁王門は寺の顔とも呼べる存在で、建築としても大きく壮麗に作られることが多いようです。一方、西門はその名の通り、敷地の西側はその名の通り、敷地の西側に設けられた出入り口の事を指し、仁王門のような宗教的・象徴的意味は持ちません。西門は境内の動線を確認するための実務的な門であるのに対し、西門は方角によって名称がつけられたシンプルな出入り口です。このように二つの門は、設置される意味も役割も大きく異なっており、寺院の構造を理解するうえで重要な違いがあります⁽²⁾。

仁王門と西門は、寺院の中で生まれる体験の違いという視点からも区別できます。仁王門をくぐると、巨大な門や仁王像の迫力によって、参拝者は自然と心が切り替わり、境内へ入る準備が整います。一方、西門は生活動線として使われることが多く、日常の延長線上にある出入口です。つまり、仁王門は非日常へ入る入口、西門は日常と境内をつなぐ入口という体験の差が大きな特徴でした⁽³⁾。

京都西門は、大学の正門と比べると目立つ存在ではなく、初めて訪れた人にとっては「裏口」のような印象を受けます。しかし、実際に現地を歩いてみると、多くの学生が通学の際に利用しており、日常的に重要な出入口として機能していることが分かりました。特に通学時間帯には学生の往来が多く、自転車や徒歩で門を出入りする姿が目立ちました。

西門周辺には、個人経営の飲食店や住宅が多く立ち並んでおり、観光地としての京都というイメージよりも、生活の場としての落ち着いた雰囲気が感じられました。このことから、西門は観光客向けというよりも、学生や地域住民の生活と密接に関わる空間であるといえます。また、門の規模が控えめである点も、人々の日常動線に自然に溶け込む要因になっていました。

人の流れを観察すると、授業開始前後の時間帯には学生の利用が集中し、それ以外の時間帯では地域住民や近隣施設を利用する人の姿が見られました。このように、西門は大学関係者だけのための空間ではなく、地域に開かれた出入口としての役割を果たしていることが分かります。さらに、歩道や道路の幅は比較的余裕があり、歩行者の安全が意識された構造となっていた点も印象的でした。

一方で、案内表示は多くなく、外から訪れる人にとってはやや分かりにくいと感じた。この点は、西門が積極的に人を集める場所ではなく、日常利用を重視した門であることを示していると考えました。

以上のことから、京都西門は目立たない存在でありながら、お寺と地域を結びつける重要な生活動線として機能していました。派手さはないが、日常を支える門としての価値が高く、大学の活動を裏側から支える存在であると感じました。

【注】

(1)森清範・田辺聖子『古寺巡礼京都 26 清水寺』淡交社, 26-27 ページ.

(2)同上

(3)同上

【参考文献】

森清範・田辺聖子『古寺巡礼京都 26 清水寺』淡交社



写真1 清水寺の西門、撮影:中嶋伸輝

二年坂、三年坂について

国際観光学科 1年 深海心渚

本レポートでは京都の二年坂、三年坂について書きます。私は過去に訪れたことがありますが、坂について興味を持ったことがなかったのでこのテーマに決定しました。

横山正昭の『絶景を巡る京都』によると、三年坂は二年坂とともに清水寺は拝道として造られた三年坂は、清水寺の子安塔（こやすとう）の安産信仰から産寧坂とも記されています。また都の埋葬地であった鳥辺野（とりべの）へ通じる道であるため、「石段で転ぶと3年で死ぬ」という俗信もあります。石段下の土産店で厄除けのひょうたんを売るのはだめだということです。石畳の坂と家並みが折り重なって、向こうまで続いてゆく風景は、京都らしい情趣に溢れ、春夏秋冬、多くの人々が散策を楽しんでいます。三年坂の一角に、大正時代の代表的な画家・詩人、竹久夢二が彦乃と暮らしていたという、「夢二寓居址」が刻まれた石碑が立っているとのこと¹⁾。

清水康史の『まっふる京都 mimi』によると、三年坂は安産を願い清水参りをする人が行き交ったことから名付けられたそうです。清水坂から北へ降りる石段がハイライトとのこと。二年坂落ち着いた807年（大同2）年にできてから、または三年（産寧）に続くからなど、名の由来には諸説あるとのこと²⁾。

竹内俊則の『新選京都名所会』によると、三年坂は清水寺経書堂の左手を北へ降りる石段の坂道をいうそうです。もとは清水坂懐門の南にあった泰産寺（子安塔）に因んで産寧坂と呼ばれたのが、轉じて、三年坂になったといわれているそうです。一説には大同三年にこの坂道が開かれたので名付けたとも言われ、明らかではないとのこと。三年坂に続いて北に降りると二年坂があり、道の両側にはない土産物屋や茶店、骨重品屋が軒をつらね、京情緒が溢れているとのこと³⁾。

実際に二年坂、三年坂を見て思ったことは、紅葉や清水寺のライトアップ開始日と重なり多くの観光客の人が訪れていてとても混雑していました。そのため二年坂、三年坂についてゆっくりと見ることができませんでした。清水寺を目指し歩いていた時に前からも後ろからもたくさんの人が押し寄せてきて身動きが取れずまるで朝の満員電車に乗っているようでした。歩いている途中で二年坂、三年坂について説明の看板がありました(写真1)。その看板によると、「大正初期、現在の家並となり、国の町並保存地域に指定されている」そうです。街並みは、現代のものとは全く異なる木造の家並みや石畳が続いていました。まるでその時から時間が止まっているように感じ、その場にいるだけで歴史を感じることができました。道幅が狭い部分では人の流れが悪く、歩くのに時間がかかりました。

過去に坂や清水寺を何度か訪れたことがありますが、坂について考えたことや思ったことはなく、ただ清水寺に行くため道として歩いていました。ですが今回事前学習を通し

て、坂の古い歴史や言い伝えについて学べてより京都について興味を持ちました。また行く機会があれば空いている時期に行きたいです。

【注】

- 1)横内正昭『絶景を巡る京都』ワニブックス, 2017年, 44ページ.
- 2)清水康史『まっぷる京都 mimi』昭文社, 2021年, 99ページ.
- 3)竹村俊則『新選京都名所会』白川書院, 1958年, 36ページ.

【参考文献】

- 清水康史『まっぷる京都 mimi』昭文社, 2021年.
竹村俊則『新選京都名所会』白川書院, 1958年.
横内正昭『絶景を巡る京都』ワニブックス, 2017年.



写真1 写真1 三年坂周辺絵図、撮影:深海心渚

清水寺周辺の坂について

国際観光学科 1年 西村 知甫

1. はじめに

私は小学生の時に修学旅行で清水寺と周辺の坂（産寧坂・二寧坂）を訪れたことがあります。現在はインバウンド観光客が増え、坂は観光客でいっぱいになっているというニュースを観て、当時と比べて印象にどんな違いがあるか気になりました。また、坂の伝統的な街並みをどう守っているのかに興味があり、坂について調査しようと思いました。

このレポートでは清水寺周辺の坂について事前学習し、実際に見て思ったことについて書きたいと思います。

2. 安寧坂・二寧坂とは

『まっふる京都奈良』によると、次のように記されています。

●産寧坂 さんねいざか(三年坂 さんねんざか)

八坂から清水寺に通じる約 100m の坂道で、その名の由来は諸説あります（豊臣秀吉の正妻・ねねが子供の誕生を念じて『産・念』坂を上がり清水寺にお参りしていたことや、大同 3（808）年の清水寺創建の際に開かれたことなど）。町家造りの古めかしい造りのみやげ店が並ぶ京情緒あふれる風景は重要伝統的建築物保存地区にも選定され、一年中観光客でにぎわいます¹⁾。

●二寧坂 にねいざか(二年坂 にねんざか)

清水寺から続く参道の、ゆるやかな坂道。産寧坂同様に名前の由来は諸説あり、大同 2（807）年に坂が後備されたから、産寧坂の下にあるからなどがあります。道沿いに並ぶ老舗雑貨店や甘味処は、間口が狭く見行きが深い町家の建物も多く、京都らしい風景が楽しめるのも魅力のひとつ。産寧坂よりも静かで落ち着いています²⁾。

3. 伝統的建造物群について

京都市ホームページによると、京都市では、昭和 47 年に「京都市市街地景観条例」を制定し、京都の歴史的な町並みの整備を独自制度でおこなっていました。昭和 50 年の文化財保護法改正で、伝統的建造物群保存地区制度が創設され、産寧坂地区（昭和 51 年地区指定）を伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に指定しました。平成 7 年 12 月には、地元の人々から町並み保存の要望が強かった石塀小路地区を安寧坂地区に加え、指定地域を拡大したとあります³⁾。



写真2 産寧坂、撮影：西村知甫



写真3 二寧坂、撮影：西村知甫

京都市ホームページの「産寧坂伝統的建造物群保存地区保存計画」によると、安寧坂地区一帯は平安京以前に清水寺、法観寺、祇園社などの門前町としてはじまりました。江戸時代中期以降は、これらの社寺を巡る道に沿って市街地が形成され、明治・大正時代に市街地が拡大しました。現在の道に沿って建ち並ぶ茶店や伝統工芸品を商う店は、近世の名所巡りの系譜をひくものとみることができるそうです⁴⁾。

また、同記事によると、当地区において、伝統的建造物群の特性を維持していると認められる約65パーセントの建造物を伝統的建造物と定め、伝統的建造物には外観を維持するための修理を実施しています。) 伝統的建造物以外の建造物には、当地区の伝統的建造物の特性と調和するよう修景を実施し、建築物等の修理、修景等に要する経費の一部を補助する取り組みが行われています⁵⁾。

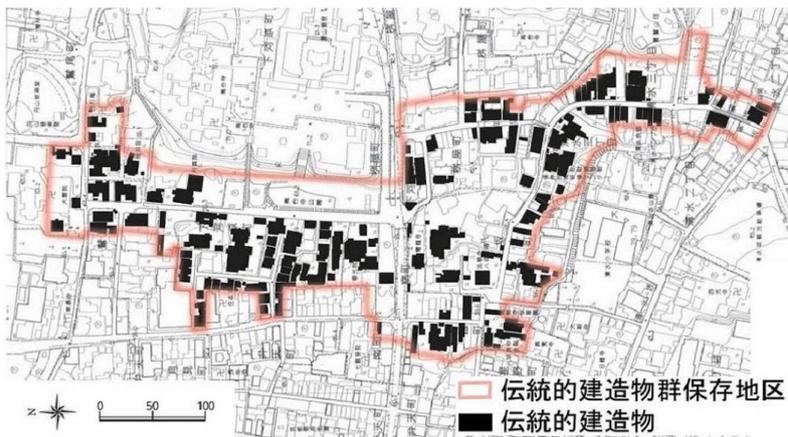


図1 産寧坂伝統的建造物群保存地区（参考図）

京都市情報館「伝統的建造物群保存地区参考図」<https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/000281768.html>（採録日：2025年11月19日）⁶⁾

4. 地図の三年坂、二年坂

新創社の『京都時代 MAP』と『京都時代 MAP』と『京都時代 MAP』によると、幕末・維新編、安土桃山編、平安京編のすべてに現在の安寧坂と同じ位置に道が記されていますが、二年坂はすべてに無いことが分かります⁷⁾。

5. 行って分かったこと

当日は清水寺の夜間のライトアップ初日だったこともあり、外国人や、親子できている観光客が多く、坂の階段では人が多すぎて渋滞が起きていました。自由に動くことができず、周辺のお店にも入りにくいと感じました。坂や周辺の建物は、とてもきれいでしたが、長時間立ち止まると通行人の邪魔になってしまい、写真を撮りにくい状況でした。ゼミ生同士がはぐれることもあり、修学旅行や遠足の時期とは季節や曜日は違うけれど、小学生だけで自由行動をすることは難しく感じました。

三年坂には解説の看板があり、三年坂の説明を4つの言語で読めるサイトに飛べるQRコードもついていました。そのサイトによると三年坂（産寧坂・再念坂）について、「三年坂で転ぶと『三年のうちに死ぬ』、『三年寿命が縮まる』といわれる逸話は、すでに延宝七年（1679年）刊行の『京師巡覧集』で紹介されており、転んで抜けた魂を瓢箪が戻してくれるとおまじないがあり、瓢箪を売る店が往時は軒を連ねた」と書かれていました⁸⁾。

現在では、瓢箪を売っているお店や、瓢箪を持っている観光客は見かけませんでした。坂周辺の建物はレトロな雰囲気がありました。見るからに古い建物ではなく、伝統的建造物に定められている建物と、それ以外の建物の見分けがあまりつかないくらい綺麗でした。安全性のために雰囲気を維持しつつ修理がされているからかなと考えました。また、坂周辺の道路のグリーンベルトが茶色になっており、他では見かけない方法で景観に配慮されていたことが印象に残りました（写真3）。



写真3. 坂周辺の茶色いグリーンベルト、撮影：西村知甫

6. まとめ

清水寺周辺の坂は観光客がとても多く、私が小学生の時に訪れた際の印象とは違っていました。一方で、京都市が昔から、伝統的な街並みを守る制度を整え、町全体の景観を守

る取り組みをしてきたことが、現地を訪れることで実感できました。観光地として魅力的な景観を守り続けながら、安全性や快適さを確保することの両立が求められると考えます。また、産寧坂の逸話に倣って観光客がみんな瓢箪を持ち歩くことがあれば、文化の体験として面白いだろうなと思いました。

【注】

- 1)黒田茂夫『まっふる京都・奈良』昭文社、2017年、28ページ。
- 2)同書、29ページ。
- 3)京都市情報館「伝統的建造物群保存地区」<https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000281305.html>（採録日：2025年11月12日）
- 4)京都市情報館「産寧坂伝統的建造物群保存地区保存計画」<https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000281761.html>（採録日：2025年11月18日）
- 5)同上。
- 6)京都市情報館「伝統的建造物群保存地区参考図」<https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000281768.html>（採録日：2025年11月19日）
- 7)新創社・松岡満『京都時代MAP 幕末・維新編』光村推古書院、2003年、30-32ページ、新創社『京都時代MAP 平安京編』光村推古書院、2008年、86-88ページ、新創社・松岡満『京都時代MAP 安土桃山編』光村推古書院、2006年、24-26ページ。
- 8)「三年坂（産寧坂・再念坂）」<https://ja.kyoto.travel/komafuda/show.php?id=2239&lang=ja>（採録日：2025年12月3日）。

【参考文献】

- 黒田茂夫『まっふる京都・奈良』昭文社、2017年。
新創社・松岡満『京都時代MAP 幕末・維新編』光村推古書院、2003年。
新創社『京都時代MAP 平安京編』光村推古書院、2008年、新創社。
松岡満『京都時代MAP 安土桃山編』光村推古書院、2006年。
京都市情報館「伝統的建造物群保存地区」<https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000281305.html>（採録日：2025年11月12日）。
京都市情報館「産寧坂伝統的建造物群保存地区保存計画」<https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000281761.html>（採録日：2025年11月18日）。
京都市情報館「伝統的建造物群保存地区参考図」<https://www.city.kyoto.lg.jp/tokei/page/0000281768.html>（採録日：2025年11月19日）。
「三年坂（産寧坂・再念坂）」<https://ja.kyoto.travel/komafuda/show.php?id=2239&lang=ja>（採録日：2025年12月3日）。

六波羅蜜寺の文化財について

国際観光学科 1年 北野琉斗

1. はじめに

六波羅蜜寺は、さまざまな歴史が刻まれており、インパクトの強い空也上人立像などがあり、興味を惹かれました。本レポートでは、事前学習を通じて、実際に六波羅蜜寺を訪れて感じたことを書いていきます。

2. 無数の泥塔出土

1977年に「榎（かや）の木祭り」で慎潮新人賞を受賞、同作で同年下半期に芥川賞を受賞し、現在は連歌会の宗匠として活動する高城修三氏によると、「昭和四十一年（一九六六）六月、六波羅蜜寺の本堂解体修理で思わぬ大発見があった。内陣柱の磁石下部から八千体の泥塔（でいとう）が発掘された。京都府教育委員会文化財保護課は、仏教民俗史上の重要資料と見て奈良国立文化財研究所の指導を受け二週間にわたって調査した」と述べています¹⁾。

また、「泥塔は貴族や庶民が罪障消滅、息災延命を祈願して埋めたもので、五輪塔形式。現本堂須弥壇下の南北八・八メートル、東西二・三メートルのところへ楕円状態に埋め込まれ、厚さ四十センチメートルにも堆積していた。五輪は大半がバラバラだったが、復元すると高さは八センチメートルほどで、一部は赤色顔料が使われていた。土を手でひねったものと五輪全体を二枚の型にはめて作ったものがあり、ざっと八千体」と述べています²⁾。

このように、八千体の泥塔といった膨大な数の遺物が出土されたことが魅力的だと考えます。

3. 六波羅蜜寺の本堂

連歌会の宗匠として活動する高城修三は、「寿永二年（一一八三）の兵火で焼失した他の本堂とは異なり、唯一焼失を免れた現存の本堂であり、貞治二年（一三六三）に再建された国の重要文化財です」と述べています³⁾。

六波羅蜜寺は唯一焼失を免れた本堂として残っていることに魅力を感じます。

4. 六波羅蜜寺を訪れてみて

まず、六波羅蜜寺の入り口には、十一面観音像があり、その横には祈りを込めて三回手前に回すという願石がありました。初めて見たものだったので、興味深かったです。

それから、右に曲がりまっすぐ行くと、左手に本堂があります。本堂の前には、常香炉と呼ばれる体の悪い箇所に線香の煙を浴びせるというものがあり、隣にはろうそく立てもありました。

このように、六波羅蜜寺には健康を願うことや悪いものを取り去り、身を清めてから本堂に入ることができます。また、兵火の中で唯一焼失を免れ、現存している歴史的な本堂であることが分かり、非常に感動する場所でした。



写真1 六波羅蜜寺の本堂 撮影：渡辺和之

【注】

- 1) 川崎頓性、高城修三『六波羅蜜寺』淡交社、2007年、94ページ。
- 2) 同書、同ページ。
- 3) 同書、97ページ。

【参考文献】

川崎頓性、高城修三『六波羅蜜寺』淡交社、2007年。

空也上人像について

国際観光学科1年 中村 駿太

1. はじめに

本レポートでは、六波羅蜜寺に安置されている空也上人像を取り上げます。空也上人像は、口から六体の阿弥陀仏が現れるという非常に特徴的な表現をもつ仏像であり、日本仏教彫刻の中でも特異な存在です。本像を通して、空也上人が行った念仏行の内容や、それを具体的な造形として表現した彫刻技法、さらに当時の社会や信仰との関わりを明らかにすることを目的とします。

2. 像の概要

六波羅蜜寺（ろくはらみつじ）に安置される空也上人（くうやしょうにん）像は、平安中期に活躍した念仏僧・空也（903-972）の姿を写実的に表した、極めて特異かつ重要な仏像です。村田靖子氏の『京都の仏像』によると、空也は「市聖（いちのひじり／市中で民衆に布教した聖）」と称され、貴族だけでなく一般民衆へ積極的に念仏（ねんぶつ／仏の名を唱えて救いを願う修行）を説いた人物として知られています⁽¹⁾。

本像は、その空也の行脚（あんぎゃ／各地を巡って修行・布教すること）する姿をそのまま捉えた造形であり、杖をつき一步を踏み出した姿勢、粗衣をまとう身体、やせた体軀（たいく／体つき）などから、宗教者としての質素な生活が象徴的に表されています。

また、最も特徴的なのは、口から六体の阿弥陀仏が連続して現れている表現です。これは六字名号（ろくじみょうごう／「南無阿弥陀仏」の六文字）である「南無阿弥陀仏」が、具体的な仏の姿となって顕現（けんげん／目に見える形で現れること）するという思想を具象化（ぐしょうか／抽象的な考えを形として表すこと）したものであり、他に類例を見ない造形です⁽²⁾。この点から、本像は空也の信仰実践そのものを視覚的に伝える資料として、極めて高い価値を有しているといえます。

3. 念仏行と造形技法

同書によれば、空也は疫病が流行した京都の町中を歩き、鉦鼓（しょうこ／小型の打楽器）を鳴らしながら念仏を唱え、人々の苦しみを救済しようとしたと記されています。本像に見られる鉦鼓や杖の表現は、こうした空也の宗教実践を忠実に反映したものと考えられます⁽³⁾。

また、像の彫刻技法にも注目すべき点が多くあります。空也上人像は平安末期の仏師・康勝（こうしょう）作と伝えられており⁽⁴⁾、衣文（いもん／衣服のしわ）の深い彫り、頬のこけ具合、緊張感のある筋肉表現などには、後の鎌倉彫刻へと続く写実性（しゃじつせい／現実に近い表現）の源流が認められます。この写実的な造形は、単に人物を再現するためのものではなく、空也が背負った精神的な重荷や、信仰の真摯さを観者（かんじゃ／

見る人)に直接伝える役割を果たしています。さらに、六体の阿弥陀仏が連なる彫刻は高度な技術を要するものであり、それぞれが微妙に異なる姿で表現されている点からも、当時の職人の高い技量をうかがうことができます⁽⁵⁾。

4. 歴史的背景と信仰

空也の活動は、疫病や飢饉、戦乱などの社会不安が続いた時代と重なっています。同書によると、空也は庶民の中に深く入り込み、彼らと同じ視点に立って救済を行ったことから、幅広い階層の人々に支持されたと記されています。また、空也の念仏行は後に「市中での布教」という日本独自の仏教文化の基盤を築き、民衆仏教の発展に決定的な役割を果たしました。本像は、そうした空也の姿を固定化した存在であり、当時の宗教実践の具体像を伝える一次資料として、極めて高い価値をもっています⁽⁶⁾。

さらに同書によれば、六波羅蜜寺における空也信仰は中世以降も受け継がれ、江戸時代には庶民信仰として広く流布しました。近代以降も空也上人像は、京都の文化財としてだけでなく、念仏信仰の象徴として多くの参拝者に親しまれています。この像の存在は、空也の精神が単なる歴史上の人物にとどまらず、現代の宗教文化にも息づいていることを示しています⁽⁷⁾。

5. フィールドワークでわかったこと

実際に六波羅蜜寺を訪れてみると、外国人観光客がほとんどだと思っていましたが、意外にも日本人の参拝者も多く見られ、その点が印象に残りました。写真や書籍で見ただけではあまり印象に残らなかったのですが、現地で実物を前にすると、長い歴史の積み重ねを感じることができ、大きな感動を覚えました。

6. まとめ

京都では清水寺が最も有名な寺院だと思っていましたが、今回の見学を通して、ほかの寺院にもそれぞれ独自の歴史や魅力があることを実感しました。寺巡りをする人々の気持ちが少し理解できたように思います。訪れた日はご本尊の仏像が公開されていませんでしたが、それも含めて静かに寺の雰囲気を楽しむことができ、良い体験になりました。

【注】

(1)村田靖子 2007『京都の仏像』淡交社, p.33。

(2)同書, p.33-34。

(3)同書, p.34-35。

(4)同書, p.35。

(5)同書, p.35。

(6)同書, p.35-36。

(7)同書, p.37。

【参考文献】

村田靖子 2007『京都の仏像』淡交社。



写真1 六波羅蜜寺（撮影：中村駿太）



写真2 空也上人像（撮影：中村駿太）

京都の団子について

国際観光学科 1年 金光羽海

1.はじめに

京都の団子は昔から土地の文化や季節に結びついてきた食べ物で、みたらし団子やおはらみだんご、よもぎだんごなど地域ごとに特色があります。本レポートでは京都の団子の特徴や清水寺近くでみたらし団子を食べた感想をまとめます。

2.京都の団子について

京都の団子は、土地の歴史や文化を映す和菓子であり、地域ごとの特色を持つ団子が数多く存在します。まず、京都を代表するのが下鴨神社に由来するみたらし団子です。御手洗池の水泡を模した五玉刺しの形は人の五体を表すとされ、厄除けの意味を持ちます。甘辛い醤油だれをまとった姿は観光客にも馴染み深く、京都の食文化を象徴する存在です¹⁾。

一方で、『聞き書 京都の食事』によると、洛北の大原で親しまれるおはらみだんごは、素朴な味わいが魅力です。地元の人々が祭礼や行事に合わせて団子を作り、地域の絆を深めてきました。田植え休みに神棚に供えて稲の根がよく張るように祈り、田植えに雇った人の手間代、馬代などを支払うのもこの日だといいます²⁾。

また、よもぎだんごも京都の団子文化を語る上で重要です。『聞き書 京都の食事』によると、暖かい気候になると、子どもや年寄りが田のあぜや土手に行き、よもぎを摘み、よもぎだんごを作っていたといいます³⁾。和菓子の季節.comによると、よもぎだんごはほうれん草の3倍以上の食物繊維を含むよもぎの柔らかい新芽を餅米につき込むため、若草色が特徴になっているといいます⁴⁾。

このように、京都の団子は単なる甘味ではなく、神事や地域文化、季節感を映し出す存在です。みたらし団子の格式、素朴なおはらみだんご、香り高いよもぎだんご。それぞれが京都の人々の暮らしに寄り添い、今もなお多くの人に愛され続けています。

3.団子を食べた感想

今回、実際にフィールドワークで京都の清水寺に行き、茶わん坂にある「とにまる」でみたらし団子を食べました。注文すると網の上から取り上げ、タレに浸して提供してもらえるみたらし団子はとてもあたたかく、素朴でありながらとても美味しかったです。

炭火で焼かれた団子は外側が香ばしく、中はやわらかくもちもちとした食感で、そこに絡むタレは、甘さと醤油の塩気が絶妙に調和していて、ただ甘いだけではなく、何本でも食べられそうだと思います。

寒い中食べたあたたかいみたらし団子は、満足感があり、また食べたいと感じました。

4.まとめ

京都の団子は、歴史や文化、季節を映す食べ物であることがわかりました。みたらし団子は厄除けの意味を持ち、観光客にも親しまれ、おはらみだんごは地域の絆を深め、よもぎだんごは春の香りと薬草の力を伝えます。また、初めて清水寺近くでみたらし団子を食べ、貴重な経験をすることができました。団子は京都の歴史や文化において重要な役割を担っていると感じました。

【注】

- 1) みたらし本舗茶月「みたらし団子の歴史」https://mitarashi.jp/mitarashi_history(採録日:2025年11月19日)
- 2) 「おはらみだんご」「日本の食生活全集・京都」編集委員会『日本の食生活全集聞き書：京都の食事』社団法人 農山漁村文化協会、1985年、37ページ。
- 3) 「よもぎだんご」「日本の食生活全集・京都」編集委員会『日本の食生活全集聞き書：京都の食事』社団法人 農山漁村文化協会、1985年、37ページ。
- 4) 「和菓子の季節.com よもぎもちの特徴・歴史・味」<https://wagashi-season.com/%e3%82%88%e3%82%82%e3%81%8e%e3%82%82%e3%81%a1/>
(採録日:2025年11月19日)



写真1 みたらし団子 撮影:金光羽海

抹茶について

国際観光学部 1年 庄礼有那

1、日本茶の歴史について

今では、日常的に飲まれている日本茶だが、一般の市民が気軽に手にできるようになるまでには、様々な変化がありました¹⁾。「日本各地に広がっていくお茶は、碾茶から始まり、詫び茶や茶の湯を経て釜炒り茶、煎茶、玉露と飲まれる環境と飲む人が変わってゆく」と述べられています²⁾。1207年、明恵上人が茶の種を京都の栴尾にまき、これが宇治茶の元祖となります。

2、お茶の種類

カフェインが少なく香ばしい風味のほうじ茶。煎茶や茎茶などを高温で炒ったものです。炒った米のかぐわしさと茶葉のハーモニーの玄米茶。干飯を炒って、煎茶や番茶などにブレンドしたものです。強い苦みの中に優しい甘みが広がる抹茶。玉露と同じように被覆栽培した新芽を蒸し、それを揉まずに乾燥させた「碾茶」を石臼で焼いたものです。

3、粉茶と粉末茶

回転寿司店などにあるお湯で溶いて飲むパウダーのお茶は粉末茶といい、粉茶とは別物である。粒度は抹茶よりも大きく、ダマができにくいです。粉碎時に香りがとびやすいため、製造各社は工夫をしています³⁾。

実際にフィールドワークに行ってみて抹茶で作られている食べ物がたくさんあって驚きました。抹茶大福や、抹茶ラテ、抹茶コロッケなどがありました。私が実際に食べたのは、抹茶大福と抹茶ラテなのですが、抹茶大福は、外側のもちもちした生地にしっかり抹茶の香りがあるって食べたときに苦みと甘さのバランスがちょうどよかったです。抹茶ラテは、普段飲む抹茶よりも風味がしっかりしていて驚きました。甘さが少し控えめで、抹茶の味を楽しめるところがよかったです。その中でも私が一番驚いたのは、抹茶パフェバーです。抹茶パフェバーは、抹茶パフェをアイスバーにしたものです。実際には食べてないのですが、SNSでよく見たことがあり、実際に見ることができてよかったです。京都で、抹茶の本物感を感じることができました。京都で飲む抹茶は特別感が増して抹茶の魅力を感じることができました。京都の雰囲気の中で味わうと、抹茶が飲み物、食べ物だけでな

く、体験として楽しむことができました。



写真1 抹茶ドリンク 撮影：奥村心海

写真2 抹茶パフェバー 撮影：庄礼有那

【注】

- 1) スタジオタッククリエイティブ『日本茶の事典』2018年、114ページ。
- 2) 同書、同ページ。
- 3) 同書、12ページ。

【参考文献】

スタジオタッククリエイティブ2018『日本茶の事典』スタジオタッククリエイティブ。

京都で有名な湯葉チーズの秘密

国際観光学科1年 白井優姫

湯葉チーズは、京都・嵐山の名物として販売されている総菜系スナックで、和の伝統素材です。湯葉を現代風アレンジした商品です⁽¹⁾。外側にはサクサクとした湯葉が使われていて、その内側にはとろけるチーズと魚のすり身が包まれています⁽²⁾。揚げることで湯葉の食感はさらに軽くなってサクサクで、見た目はきつね色で、見た目も食欲がそそられる仕上がりです。湯葉の優しい味とチーズの濃厚さが特徴的です。さらにすり身の旨味が組み合わさることで、湯葉とチーズとすり身のバランスが良い味わいが生まれている点が大きな特徴です。また、本商品は「ほわっとさくっ」というキャッチフレーズで、そこからわかるように、食感のコントラストが大きな魅力となっています⁽³⁾。外側の軽い食感と、内側のとろける素材というギャップが、満足度の高い食体験を提供していると考えられます。観光地・嵐山の名物として打ち出されていることから、観光客向けの「気軽に楽しめる特別感のある商品」です。湯葉という伝統食材を使いつつ、チーズという洋風素材を組み合わせたことで、若年層にも受け入れやすい工夫がされている点も評価できます。総合的に、湯葉チーズは伝統と現代の要素を合わせて、手軽さとリッチ感の両方がある魅力的な商品です。今回、初めて「湯葉チーズ」という料理を食べてみました。お店の前には人がたくさん並んでいて、買うまでに時間がかかりました。受け取った湯葉チーズの見た目は細長いというより、まんまるとした形で、意外と大きくて、一口では絶対食べられないサイズでした。棒に刺さっていて、串カツみたいだと思いました。揚げたてだったのか持った瞬間からとても熱くて、すぐに食べるのは無理でした。少し待ってから食べてみると、外側の湯葉がサクサクしていて、その食感や見た目は揚げ餃子みたいでした。食べ進めるうちに最後のほうでは持っている手が少し疲れてくるほどでした。中からはあつあつのチーズがとろっと出てきて、思っていたよりも濃厚でした。湯葉はあっさりしているイメージだったけどチーズが濃厚で意外と相性が良くて驚きました。さらに中にはすり身が入っていて、チーズかまぼこみたいでした。外はサクサク、中はとろとろであつあつという食感の差が楽しくて、食べていて飽きませんでした。揚げ物なのに油っこすぎず、最後までおいしく食べられました。

【注】

- (1) 湯葉チーズ公式サイト「湯葉チーズ」<https://www.baizando.jp/shop/yuba.html> (閲覧日 2026年1月)
- (2) 同上
- (3) 同上

【参考文献】

湯葉チーズ公式サイト「湯葉チーズ」<https://www.baizando.jp/shop/yuba.html> (閲覧日 2026年1月)

おわりに

清水寺はうちの学生にも優しいお寺なのかもしれません。清水寺を訪れ、そう考えました。沿道の門前町の風情がよいことは言うまでもありません。また、昨今の学生が好きな食べ歩きもできます。境内に入れば、清水の舞台の他にも、楽しめる所がたくさんあります。男子学生は力試しの錫杖を持ち上げて「うわ、全然あがらん」と盛り上がります。学生たちの列の前後には外国人の若者が待っています。大きい錫杖は無理でも、小さい錫杖ならば若い女性でも軽々と持ち上がります。歴史的、文化的、宗教的な背景が異なっても、楽しめるようになっているのです。

出世大黒にも黒山の人ばかりです。学問成就に恋愛成就。おおよそ若者の願いはそんな所でしょう。これで身体の節々が痛い私のような中高年や病気治療を願う人々に応えれば完璧です。山登りにはまったく興味がないうちの学生が長い坂道を上り詰めて、京都市内を見下ろし、歓声を上げるのです。本堂に上がれば、みな正座してぬかずいて、敬虔にお祈りをします。ご本尊の観音様が秘仏であることも、今回学生が調べて私は知りました。厨子のなかにおられても、みな願いを聞いて下さるのでしょうか。

心配していた混雑も、まだましでした。ライトアップ直前の阿弥陀堂周辺は動けない位の人ばかりでしたが、満員電車程度です。ライトに照らされた紅葉は赤や黄色に光り輝き、京都市内の夜景とともに闇夜に浮かび上がります。以前、本堂から音羽の瀧に降りる石段を下りながら思いました。夏でも十分美しいのにこの上紅葉までしたらどんなになるのか。ライトアップはお化粧と一緒に、見せたい所に光を当てて、強調することができるのです。闇夜に浮かぶ光は、私のカメラが苦手とする所です。感度をかなり上げないと手振れが酷いのですが、学生を持つ 아이폰だとカメラがちゃんと調節してくれます。目で見るとスマホの画像の方がハイキーで、「ばえて」いるのかもしれません。

なるほど、清水寺が京都を代表する観光地であるのがよくわかりました。国籍、年齢を問わず、楽しめる要素がたくさんあるのです。清水の観音様は一切衆生をあまねく優しく包み込みます。阪南大学もかくあらねばと、思いを新たにしました（渡辺和之）。

++++
渡辺和之（編）『2025 度後期大学入門ゼミフィールドワーク報告書』阪南大学国際学部国際観光学科渡辺研究室 2026 年 2 月 15 日発行。〒580-8502 大阪府松原市天美東 5-4-33
阪南大学国際学部国際観光学科電話：072-332-1224 メール：watanabe@hannan-u.ac.jp
URL <https://www.hannan-u.ac.jp/> Kazuyuki Watanabe (ed.) 2026 Kiyomizu Temple, Kyoto: Students' Fieldwork Reports 2025. Osaka: Faculty of International Tourism, Hannan University. Address: 5-4-33, Amami-Higashi, Matsubara, Osaka, 580-8502, Japan.
E-mail: watanabe@hannan-u.ac.jp

++++